表(2)　中央アジア諸国の人口と増加率

	人口（1,000人）			年平均増加率（%）1991～1995年
	1991年	1993年	1995年	
ウズベキスタン	20,613	21,608	22,467	2.1
カザフスタン	16,793	16,986	16,679	0
タジキスタン	5,358	5,571	5,786	1.9
キルギス	4,422	4,502	4,483	0.3
トルクメニスタン	3,714	4,245	4,450	4.6

出所：国家予測統計委員会（世銀）
　　CIS諸国統計委員会

表(3)　就業構造

単位：千人

部門	1991年	1993年	1995年
生産部門	6,175	6,362	6,222
農業	3,456（41.9%）	3,681（44.5%）	3,735（45.8%）
工業	1,179（14.3%）	1,222（14.8%）	1,010（12.4%）
建設業	676	557	493
輸送業（貨物）	250	235	218
小売業	461	521	566
その他の産業	148	146	200
非生産部門	2,080	1,897	1,936
文化関連職業	1,033	989	1,038
医療	488	467	483
公共サービス	189	172	185
輸送業（旅客）	149	101	104
防衛、その他サービス部門	221	168	126
	8,255	8,259	8,158

出所：国家予測統計委員会（世銀）
（注）（　）内全就業人口に占める割合

表(4)　州別繭生産量と養蚕農家数

州	繭の生産（生繭・トン）		養蚕農家戸数	飼育従事者人数
	1996年	1997年(予想)		
カラカルパク	576.3	559.0	9,046	27,138
ブハラ	2,291.6	2,000.0	21,904	65,712
ジザク	394.1	355.0	7,041	21,123
カシュカダリア	1,913.3	1,772.0	21,635	64,905
ナブイ	701.0	612.0	7,429	22,287
サマルカンド	2,116.7	2,000.0	36,623	109,869
スルハニダリア	974.4	800.0	17,548	52,644
シルダリア	351.9	340.0	7,308	21,924
タシケント	1,053.1	945.0	19,174	57,522
ホレズム	1,747.7	1,750.0	21,190	63,570
PILLA関連　合　計	12,120.1	11,132.0	168,898	506,694
アンジジャン	3,112.0	3,120.0	46,484	139,452
ナマンガン	2,418.9	2,600.0	48,090	144,270
フェルガナ	4,045.6	4,200.0	54,000	162,000
UZLEGPROM　合　計（軽工業省関連）	9,576.5	9,920.0	148,574	445,722
総　　計	21,696.6	21,052.0	317,472	952,416

出所：農業省

表(5)　品目別輸出入額

単位：百万ドル

輸出			輸入		
	1994年	1995年		1994年	1995年
綿花	1,554.3	1,798.9	食品	804.6	526
食品	109.1	64.2	うち小麦	(430)	(244.6)
化学品	75.5	91.2	化学品	n.a	264.6
金属	83.2	173.0	金属	n.a	164.6
エネルギー	452.1	435.4	エネルギー	344.1	54.0
サービス	141.0	287.7	サービス	n.a	144.9
機械・輸送機	105.7	89.0	機械類	415.3	1,404.8
金その他	582.2	780.6	その他	562.1	333.8
合　　計	3,103.1	3,720.0	合　　計	2,556.1	2,892.7

出所：国家予測統計委員会（世銀）

付属資料２．ウズベキスタン共和国概要

資料：在ウズベキスタン
　　日本国大使館

(1) 概況

独立：1991年８月31日（ただし、独立記念日は９月１日）

人口：2,270万人

面積：44万7,400㎢（日本の約1.2倍）

首都：タシケント（人口212万人）

民族：ウズベク人（75.8%）、ロシア人（６%）、タジク人（4.8%）、カザフ人（4.1%）、タタール人（1.6%）

言語：ウズベク語（公用語。なお、ロシア語が民族間交流語として使用されている）

宗教：イスラム教（スンニ派が優勢）

通貨：スム（97年２月現在、１US$=56スム）

国民一人当たりのGNP：950ドル

(2) 歴史

紀元前	６世紀	ペルシャ帝国に属す。
	４世紀	アレキサンドロス大王により制圧される。
紀元	２世紀頃	イラン系ソグド、ブハラ、ホレズム等の割拠時代。
	７世紀以降	トルコ系遊牧民が進出。次第にトルコ化が進む。
	13世紀	モンゴル。タタールの征服。イスラム教の受容。
	14～16世紀	チムール帝国（首都サマルカンド）の支配。
	14世紀末	地域全体がトルコ化する。
	15世紀中葉	遊牧民ウズベクの国家が出現。
	1567	ウズベク族のシャバイニ朝、チムール帝国を滅ぼす。（ブハラ・ハーン国の形成）遊牧民ウズベクの定住が進み、定住地域のトルコ系住民全体をウズベクと称するようになる。
	19世紀	ロシア帝国の中央アジア進出が本格化。
	1864	ロシア軍、ウズベキスタンへの攻勢を開始。
	1865	ロシア帝国、タシケントを占拠。
	1867	ロシア帝国、タシケントに総督府を設置し、タシケントを省都するトルキスタン省を設立。以後同地域を綿花の一大供給地とすべ

く植民政策を強力に推進。

1868	ウズベク人国家ブハラ・ハーン国、ロシアの属国となる。
1873	ウズベク人国家ヒヴァ・ハーン国、ロシアの属国となる。
1876	ウズベク人国家ホーカンド・ハーン国、フェルガナ州としてロシア帝国に併合される。
1916～30	ロシアに併合された中央アジア各地で、ロシア帝国（革命後はソ連）の支配に抗してイスラム勢力による暴動が発生。「バスマチ運動」と称されるこの反ソ運動は1918～24年に最高潮に達し（100万人以上の死者を出したと言われる）、発足間もないソ連政権に多大の脅威を与えた。
1918～24	ロシア革命後、「ブハラ人民ソヴィエト共和国」、「ホレズム人民ソヴィエト共和国」、またロシア共和国内に「トルキスタン自治ソヴィエト社会主義共和国」等が樹立される。
1924	中央アジアの民族間国境画定により、「ウズベク・ソヴィエト社会主義共和国」が樹立され、ソ連邦に加盟。
1990.6.20	共和国主権宣言。
1990.8.31	共和国独立宣言、国名を「ウズベキスタン共和国」と変更。（なお、独立記念日は9月1日に制定）

(3) 自然

ウズベキスタンは、ユーラシア大陸の内奥に位置し、外洋への出口はない。国境を接するカザフスタン、キルギス、タジキスタン、トルクメニスタン、アフダニスタンのいずれも海には面しておらず、世界で唯一の"DOUBLE LAND-LOCKED COUNTRY"（海に到達するまでに国境を2回越えねばならない国）である。

国土の4分の3は砂漠とステップが占め、大陸性の半乾燥気候である。寒暖の差が激しく、夏は40℃以上、冬は、希ではあるがマイナス20℃以下になることもある。

中央アジアの2大河川、アムダリア川とシルダリア川は、東のパミール高原とテンシャン山脈に源を発し、キジルクム砂漠を挟んで流れ、アラル海に注ぐ。

(4) 政治

1）政治体制

大統領制。大統領は国家元首であるとともに行政機関の長である。

現在の大統領はカリーモフ大統領（1991年12月選出）、任期は5年であるが、1995年3

月の国民投票により、カリーモフ大統領の任期は2000年まで延長された。

2）議会

250名の議員からなる最高会議（1院制、任期5年、現在の議長はハリーロフE.K.)。現在の議員は1994年12月に選出された。政党は与党「人民民主党」と野党「祖国復興党」の2つがあり、右250議席のうち83議席が政党代表にあてられている（人民民主党－69議席、祖国復興党－14議席。残り167議席は地域代表)。両党間に政策等をめぐる大きな対立はない。

3）政治情勢

ウズベキスタンは、現在カリーモフ大統領の指導の下、政治的な安定路線を目指しており、この路線はこれまでのところ成功裏に推移している。大統領と議会の対立はなく、これまでのところ大きな民族紛争もない。

また、カリーモフ大統領は独立後の経済復興を第一の課題とし、これを広く国民に周知徹底させたこと、また国民の大半がこれを支持していることから、ウズベキスタン経済は中央アジアの中でも最も早い立ち直りをみせ、現在独立後の不安定な時期を乗り越えつつあると言える。

他方、この路線は、集会、デモに対する規制、新聞・雑誌等への国家の関与、実質的野党の不在等、人権、民主化の観点からは居間なお一定の制約を伴っていると言える。しかしながら、内戦状態のアフガニスタン、厳戒令下にあるタジキスタンとの国境に接していること（現在、国内に100万人余のタジク人を抱えている)、イスラム原理主義の動向等にかんがみれば、ウズベキスタンは政治的安定に敏感にならざるを得ず、一定の政治的引き締め政策をとらざるを得ない事情もそれなりに理解できるところである。

(5) 外交

1）外交政策

基本的には全方位外交。とりわけ中央アジア諸国との関係を重視する。ただし、イラン、トルコ、中国との関係には若干慎重。

2）ロシア、その他周辺国との関係

ウズベキスタンにとって、当面はロシアとの関係維持が最も重要であり、ロシアとの関係なくしては成り立っていかないが、中長期的にはロシア依存を減少させる政策を打ち出している。1996年3月29日のCIS4カ国統合条約、4月2日のロシア・ベラルーシ統合条約に対しても、カリーモフ大統領は超国家的機構を伴う統合には反対との立場を表明しており、今後の動きが注目される。

他方で、中央アジア諸国との関係ではカザフスタン、キルギスと統一経済圏の創設を

目指すなど、経済を中心に協力関係を強めており、中央アジアの盟主たらんとしている。

3）欧米との関係

かつて米国はウズベキスタンの民主化が進んでいないとして、経済協力等の面で常に一定の枠内における協力にとどめてきたが、最近では、民主的な議会選挙等が行われたことなどから評価が変わってきた。民間では農業、鉱業等の分野で共同事業が進んでいる。また、1995年には防衛分野でも交流が始まり、共同軍事演習も行われている。

欧州諸国との関係では、カリーモフ大統領はすでにドイツ、フランス、イギリス等を歴訪しており、これら諸国との関係強化に努めている。

4）安全保障

安全保障面では、ウズベキスタンはアフガン紛争、タジク紛争等が国内に飛び火することを恐れており、国連においてアフガニスタンに対する武器禁輸を提案する等、紛争の解決に向けての努力を行っている。

(6) 経済

1）経済政策

ウズベキスタンの経済改革は、経済的混乱から政治的不安定を招いて民族紛争等が発生することを恐れ、あくまで漸進的な市場経済への移行に固執している。また、社会福祉政策を重視しているのもそのためである。

改革政策は徐々に進行しており、価格の自由化、企業の民営化、金融・税制改革が既に実施されている。また、通貨については、1994年6月から独自通貨「スム」が導入され、1995年7月1日に交換性通貨となった。

2）資源・産業

ウズベキスタンは天然資源が豊富で、特に金の生産高は世界第6位の年間約70トン（旧ソ連の金生産量の約3分の1）である。エネルギー資源については天然ガス輸出国であるほか、石油の自給も間もなく達成される見通しである。また石炭、非鉄金属（銀、銅、鉛、亜鉛など）産業が発達している。

農産物の面ではソ連時代に特化された綿花栽培が盛んで、その生産高は世界第4位（旧ソ連の綿花生産量の約3分の2）の約150万トンであるが、国内で加工される割合は生産の12％にとどまっている。そのほか果物、野菜類は輸出されるほどの十分な生産量があり、政府は食糧についても自給を目指している。

(7) わが国との関係

1）政府間

1991年12月：国家承認

1992年 1月：外交関係開設

1993年 1月：タシケントにわが国大使館を開設

1994年 5月：カリーモフ大統領夫妻が公式実務訪問客として訪日、羽田総理との間で首脳会談が行われたほか、両国間で共同声明の発出、条約承継の確認が行われた。

1996年 2月：在日ウズベキスタン大使館開設

2）基礎情報

在ウズベキスタン邦人：62名

タシケント駐在本邦企業： 9社

3）わが国からの支援、経済協力

① 無償援助

・小児医療機材整備計画（6.5億円：1995／3／24 E/N署名）

・ノンプロジェクト無償（9億円：1995／3／24 E/N署名）

（10億円：1995／3／4 E/N署名）

・東部地域医療機材整備計画（4億円：1996／1／11 E/N署名）

・食糧増産援助（4億円：1996／3／4 E/N署名）

（4億円：1996／11／20 E/N署名）

・道路建設機材整備計画（9.6億円：1997／2／19 E/N署名）

② 文化無償

・ナボイ劇場に対する視聴覚・照明機材

（4,700万円：1994／12／12 E/N締結）

③ 草の根無償

・医療、身体障害者自活促進、働く女性のための啓蒙活動等の5案件に約3千万円の贈与契約締結

④ 円借款

・地方通信網拡充計画（127億円：1995／6／14 E/N締結）

・客車修理工場建設計画（61.02億円：1996／6／14 E/N締結）

・地方3空港近代化計画（155.26億円：1996／10／24 E/N締結）

⑤ 人道支援

・日赤医薬品、ワクチン供与等（1,369.5万ドル：1993～1994年）

・1997年フェルガナ州等の小児病院へ200万ドルの支援予定

⑥ 技術協力・開発調査

・1995年通信行政専門家１名及び国際経済専門家１名を派遣

・昨年度に引き続き、本年度も経営管理コース等の研修員28名を日本へ受け入れ予定

・「アラル海沿岸地域６都市給水計画」及び「東ブカンタウ地域資源開発調査」の２件の開発調査を継続実施中

⑦ 輸銀融資

・コクドマラク製油所整備に89億１千万円を供与（1995年３月）、ブハラ製油所建設に69億円の融資を決定（1995年８月）

（了）

付属資料３．参考文献

本調査に当たっては、現地で資料収集をウズベキスタン国政府関係者に提出方要望したが、統計資料を含め入手することができなかった。一部世銀等から入手したのみであった。なお、本報告書作成に当たっての参考文献は以下のとおりである。

１）㈶国際協力推進協会、ウズベキスタン、開発途上国国別経済協力シリーズ中央アジア編No.２

２）国際協力事業団（1996年３月）ウズベキスタン共和国平成７年度食糧増産援助調査報告書

３）農用地整備公団（1992年）アラル海流域大規模農業開発事業調査報告書

４）岡　三徳、鈴木正昭（1995年）中央アジア地域の農林水産業特性と研究技術動向(2)ウズベキスタン、ロシア・東欧の農業、６(4)：10－19

５）岡　三徳（1995年）中央アジア諸国農業の現状と開発の課題、ウズベキスタン農業の現状と開発の課題、ロシア・東欧の農業、７(3)：14－30

６）友岡憲彦、中野寛（1994年）中央アジア・フェルガナ盆地周辺の農業景観とマメ類遺伝資源、ロシア・東欧の農業、６(1)：20－30

７）蚕糸砂糖類価格安定事業団（1991年）、ソ連蚕糸絹業調査報告書

JICA